

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

近年、問題解決力の育成が重要視されている。これに伴い、問題解決力を主体的・協働的・実践的に養うことができる PBL (Project Based Learning) が注目されている。しかし、PBL の進め方の定石やノウハウがまとめられておらず、PBL のテーマ、チームの状況などの多様性から、経験の浅い教員が適切な指導・支援を行うことが困難である。

そこで本研究では、教育現場において支援が困難とされる PBL において、教員が一定の質を満たした効果的な指導・支援を可能にすることを目標とした。目標達成のため、本研究では、PBL の手順と支援を体系的にまとめた PBL の知識体系 PBLBOK (Project Based Learning Body of Knowledge) を開発し、PBLBOK に基づく実践と評価を行い、PBLBOK の有用性と課題等を示した。

「問題解決力の育成」が今日的な課題として位置付けられているなか、問題解決指導の改善を志向した本研究の目的には十分な研究意義が認められる。

これまでの PBL の方法論に着目した研究は、抽象度が高く、再現性に乏しいものであった。また、PBL の実践に着目した研究は、非常に具体的で抽象度が低く、他の授業に適用が難しい。さらに、教員の経験によらず、再現性のある方法論についての研究は発展途上であった。本研究では、PBL の活動をプロジェクトとして捉え、プロジェクトマネジメントの知見を PBL に活用し、プロジェクトマネジメントの専門家でない経験の浅い教員であっても教育効果が再現できたという点で新規性・独創性が主張できる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

現状分析のための PBL の予備実践と問題点の抽出、問題点を踏まえた問題解決指導のための要件抽出、PBL の手順と支援を体系的にまとめた PBL の知識体系 PBLBOK の開発、PBLBOK に基づいた PBL の実践、PBLBOK の評価・考察と、適切な手順、方法で研究を遂行している。これらの遂行は研究目的に合致したものであり、当該学問分野において妥当なものであると評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、関連する先行文献が適切に収集・分析され、本研究の背景と位置づけが明確にされている。特に、問題解決力の育成と PBL の重要性に着目し、PBL 遂行における問題点や研究動向、さらにはプロジェクトマネジメントの知識体系の内容を十分に押さえている。

分析対象である教員や学生からのアンケート調査やヒアリングについては、個人情報保護・研究倫理規定を踏まえた調査の計画と実施、データの収集が適切になされている。収集データの分析には、適切な統計処理を行い、結果の解釈も無理のない解釈であった。

いずれのデータ収集・分析も労力を要するものであるが、丁寧かつ適切に行われていた。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

本研究では、PBL の手順と支援を体系的にまとめた PBL の知識体系 PBLBOK を開発し、教員養成課程の情報教育領域の 2 つの授業において PBLBOK に基づいた授業実践を行った。実践の結果、①PBL の問題解決力への貢献、②問題解決の理解度、③PBL の満足度、の 3 つの観点から、PBLBOK に基づく PBL について分析・考察を行い、その優位性を明らかにした。特筆すべきは、経験の浅い教員であっても、PBLBOK に基づく PBL によって、有効な PBL が行えることが確認できた点である。さらに本研究の新規性である、「経験によらず、経験の浅い教員でも再現が可能な PBL 指導の知識体系の開発が行えたこと」が証明されたことである。

これらのことは、問題点としてあげた「経験の浅い教員が適切な指導・支援を行うことが困難である」を学術的に議論を積み重ねて解決したことに起因する。考察結果と結論は、無理なく導出されたものであり、その妥当性も問題ないと考えられる。

上記の成果は 3 つの学術論文、1 つの国際会議で成果発表を行い、学術的な水準を満たしていることが保証される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

本研究で開発した PBLBOK が提供する構成要素等により、PBL の遂行・指導・支援における共通言語化・共通認識化によって、PBL についての全体の流れ、用語、観点を共有することで、指導における議論や比較、評価等が行いやすくなった。また、PBL の遂行・指導・支援のプロセスが明確になることで、指導が行いやすくなり、指導の計画を立てやすくなった。さらに、各プロセスで活用できる指導技法が明確になった。また、副次的なメリットとして、PBL の遂行・指導・支援におけるプロセスを管理する重要性を示すことになる。これらの点で、本研究の意義が認められる。

教員養成課程において PBL を導入した授業を含めることにより、現在よりも問題解決を効果的に遂行・指導・支援できる教員を輩出することができ、その教員が将来、問題解決を遂行・指導・支援することにより、生徒にも問題解決能力を習得させることが期待される。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本学位申請論文は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしいと評価を行った。